

註釈書に見られる *Pramāṇavārttikasvavṛtti* 異読情報について

岡 田 憲 尚

1. ダルマキールティ (ca. 600-660) の PVS_V (本稿ではこれを韻文と散文が一体になった作品とみなす立場をとる) の研究に際しては、二本のサンスクリット刊本 (= Malvania 版・Gnoli 版, 以下, M 版・G 版) の他に, PVS_V チベット訳や, PV 別行本偈のチベット訳, 諸註釈書を参照することが可能である。しかしながら, Malvania や Gnoli が扱った写本は, チベット訳者や註釈者たちが用いたと考えられる写本とは必ずしも全同とは限らず, それらの関係は検討に値する。これに関して, 筆者は, チベット訳者が M 版・G 版の写本と異系統の写本を参照していた可能性を示す資料を見出し, また, シャーキャブッディ (ca. 660-720) の PV_T 及びカルナカゴーミン¹⁾ (ca. 9-10 世紀)²⁾ の PVS_V_T に, 彼等が M 版・G 版の系統の写本を自身の所依写本としていなかったことを示唆する記述を確認したので, 本稿でこれを報告したい。

まず, 文献情報を確認しておく。M 版はパタンの Vimalagaccha で発見された写本 (16・17 世紀) に基づいた校訂版, G 版はこれとネパールで発見の写本 (13・14 世紀) の二本に基づいた校訂版である³⁾ (以下, 暫定的に, M 版のパタン写本情報は「M」, G 版のネパール写本情報は「A」, パタン写本情報は「B」と表記する。)⁴⁾。

2. PV_T 及び PVS_V_T には, A, B, M の読みを「他の人々」の採用する異読とする記述が確認される。以下に二例を挙げて, これを検討したい。

① PV I 89cd in PVS_V (A, B, M) :

bhedah sāmānyasamsr̥ṣṭo grāhyo nātra svalakṣaṇam || 89 ||^{5/6)}

この箇所に対するチベット訳, 並びに PV_T Ms・PVS_V_T は以下の通りである。

PV (D98a3f., P193b4f.), PVS_V (D286b3f., P435a1f.) :

khyad par spyi dang 'dres pa 'dir || rang gi mtshan nyid gzung bya min || (89cd)

PV_T Ms Aa5-Ab1: bhedah sāmānyasamsr̥ṣṭah pratiyata ity atrāpi vacane grāhyam na svalakṣaṇam / svalakṣaṇam eva nirdiṣṭam iti naivam boddhavyam ity arthah / ... anye tu bhedah

註釈書に見られる *Pramāṇavārttikasvavṛtti* 異読情報について (岡 田) (103)

sāmānyasamsr̥ṣṭo (*sāmānyasamsr̥ṣṭo em. (cf. PVSVT 193,7) ; sāmānyam sa(m)sr̥ṣṭo PVT Ms*)
grāhya iti pulliṅgena paṭhanti / tatrāyam arthaḥ / bhedah sāmānyasamsr̥ṣṭo grāhya ity atrāpi vacane
 na svalakṣaṇam boddhavyam iti /

PVSVT 193,4-8, Ms 72a5f.: bhedah sāmānyasamsr̥ṣṭah pratīyata ity atrāpi vacane grāhyam
 na svalakṣaṇam / svalakṣaṇam (*svalakṣaṇam svalakṣaṇam Ms ; svalakṣaṇam S*) eva nirdiṣṭam iti
 naivam boddhavyam ity arthaḥ / ... anye tu bhedah sāmānyasamsr̥ṣṭo grāhya iti pulliṅgena paṭhanti /
 tatrāyam arthaḥ / bhedah sāmānyasamsr̥ṣṭo grāhya ity atrāpi vacane na svalakṣaṇam boddhavyam /
 A, B, M には“grāhyo”という男性形が現れている。しかし、チベット訳は“grāhya-”
 を男性名詞 *bhedah* にではなく中性名詞 *svalakṣaṇam* に掛けて読んでおり、チベッ
 ト訳者が参照した写本には中性形の“grāhyam”があったと想定される。そして、
 PVT Ms と PVSVT の解釈はこのチベット訳の読みを支持する。さらに興味深い
 ことに、PVT Ms と PVSVT では男性形の“grāhyaḥ”が「他の人々」の採用する
 異読であると説明している⁷⁾。

② PV I 115'b-d in PVSV (A, B, M) :

yadi | vyavacchinnāḥ katham jñātāḥ prāg vṛkṣagrahaṇād ṛte || 115 ||⁸⁾

この箇所の子ベット訳、並びに PVT 子ベット訳・PVSVT は以下の通りである。

PV (D99a3, P194b5), PVSV (D293b7, 443b7) :

gal te rnam gcod shing gi don || 'dzin pa med na ji ltar shes || (115 'b-d)

PVT (D131a3f., P155a6ff.) : de nyid gal te rnam gcod shing gi don || zhes bya ba la sogs pas
 ston te | shing gi don 'dzin pa med na ji ltar shes (P ; shes *om.* D) zhes bya ba 'di tsam ni tshig
 le'ur byas pa'i cha yin no || mdun na zhes bya ba'i sgra ni spel mar bshad pa las ma smos te | shing
 gi don 'dzin pa med par shing 'dzin pa'i mdun rol na shing ma yin pa dag ji ltar shes zhes bya ba'i
 don to || gang dag tshig le'ur byas pa la mdun na zhes bya ba'i sgra 'don pa de dag gis ni don ces
 bya ba'i sgra 'don par mi bya'o || (PVT Ms 欠損箇所)

PVSVT 234,13-16, Ms 86a7f.: tad āha - katham ityādi / katham jñātā vṛkṣārthagrahaṇād
ṛte / ity etāvān kārīkābhāgaḥ / prākśabdas (°śabdas Ms ; °chabdas S) tu miśrakavyākhyāne
 nopāttah (°vyākhyāne nopāttah Ms, *em.* (cf. PVT D131a3f.) ; °vyākhyānenopāttah S) / vṛ-
 kṣārthagrahaṇam vinā prāg vṛkṣārthagrahaṇād avṛkṣāḥ katham jñātā ity arthaḥ / ye tu prākśabdam
kārīkāyām paṭhanti, tair arthaśabdo na paṭhitavyaḥ /

このように、PVT と PVSVT には、“katham jñātā vṛkṣārthagrahaṇād ṛte” が偈の部
 分で、“prāk” はその中途に挿入された註釈語句であるから偈には含まれないと
 の見解が示される (“vṛkṣārthagrahaṇād ṛte” でも韻律上問題はない)。この記述もまた、

(104) 註釈書に見られる *Pramāṇavārttikasvavṛtti* 異読情報について (岡 田)

原則的にチベット訳の読みを支持する⁹⁾。同時に、ここでも PVT と PVSVT は、“prāk” を偈の語句とする「他の人々」による異読の存在に言及する。そして A, B, M の読みはこの「他の人々」の異読に一致している。

3. 以上、A, B, M の系統の読みが、PVT Ms や PVT チベット訳、また、それを踏襲する PVSVT に於いて、「他の人々」の採る読みとして挙げられる事例を確認した。更に言えば、その異読箇所では、A, B, M の系統の読みと PVSVT チベット訳に示される読みは異なっており、シャーキャブッディ及びカルナカゴーミンはチベット訳の方を支持していた。つまり、チベット訳者や註釈者たちが用いた写本は、Gnoli や Malvania が校訂した写本と別系統のものであった可能性がある¹⁰⁾。PVSVT 研究に当たっては、現行サンスクリット刊本のテキストに無批判に依拠するのではなく、チベット訳や註釈書を参照しながら異読の可能性にも十分配慮しつつ、ダルマキールティの原意を推し量る必要があるだろう。

- 1) カルナカゴーミンは基本的には PVT に依拠しながら PVSVT を著述したと考えられる。尚、彼がシャーキャブッディの所説を「他の人々」(anyē) のものとして挙げる箇所も確認される。cf. PVT (D85a4ff., P100b3ff.), PVSVT 164,13-16.
- 2) 論師の年代は E. Frauwallner, “Landmarks in the History of Indian Logic,” WZKSO 5, 1961, 塚本啓祥他編著『梵語仏典の研究 IV 論書篇』, 平楽寺書店, 1990 に従った。
- 3) PVSVT(M) intro. 2, 及び PVSVT intro. XXVIII-XXIX, intro. XXXVII-XXXIX を参照。
- 4) PV チベット訳はスプーティシュリーシャーントンティとゲウエロデ (11 世紀中葉) の訳出を基に、最終的にシャーキャシュリーバドラ等とサパン (1182-1251) によって改訂が為されたものである (cf. PV D151a2ff.). PVSVT チベット訳はコロフォンに記載がなく訳者不明だが、Mejor 氏によれば、PV と同様にゲウエロデの訳出である。また、PVT チベット訳もゲウエロデが手掛けたものである (cf. PVT D282a7)。従って、生存年代等を斟酌するに、シャーキャブッディ、カルナカゴーミン、PV チベット語初訳者、及び PVSVT チベット語訳者が参照していた写本は現存のパタン写本・ネパール写本そのものではないと考えられる。cf. M. Mejor, “On the Date of the Tibetan Translations of the *Pramāṇasamuccaya* and the *Pramāṇavārttika*,” E. Steinkellner (ed.), *Studies in the Buddhist Epistemological Tradition*, Wien, 1991.
- 5) 宮坂版所収の PV も “grāhyo”。宮坂版に同偈の異読情報は挙がっていない。
- 6) 註釈書によれば、同偈はディグナーガの言明を受けたものである。しかし、筆者はこれに一致する文言を *Pramāṇasamuccaya* (-vṛtti) 及び『因明正理門論』に見つけることは出来なかった。cf. PVT (D102b1, P120b5), PVT Ms A5, PVSVT 193,2.
- 7) この箇所の PVSVT は PVT Ms テキストの引き写しである。PVT チベット訳は “anyē” 以下のテキストを欠く (cf. PVT (D102b2, P120b6f.)). 一方、PVSVT と PVT チベット

註釈書に見られる *Pramāṇavārttikasvavṛtti* 異読情報について (岡 田) (105)

語訳が一致し、且つ PVSVT ̐ と PVṬ Ms が異なる事例 (cf. PVṬ (D180b4f., P206b6) ; PVṬ Ms Bb1; PVSVT 297,11f., Ms 109b2 etc.) もあり、また、PVṬ チベット語訳と PVṬ Ms と PVSVT の三者がそれぞれ異なる記述を示す事例も確認される (cf. PVṬ (D197b6, P226a2) ; PVṬ Ms Ia9; PVSVT 322,20–323,1, Ms 118b2f. etc.).

- 8) 宮坂版所収の PV も “prāg vṛkṣagrahaṇād ṛte”. 宮坂版に異読情報は挙がっていない。
- 9) 偈自体の読みとしてはチベット訳が支持される訳である。但し、註としてあるべき “prāk” を欠く点で、チベット訳が PVṬ・PVSVT から全面的に支持されている訳ではない点には注意を払う必要があろう。以下の記述からは、PVSV チベット訳者が参照したと思われる写本もまたシャーキャブツディやカルナカゴーミンにとって所依写本でなかった様子を窺い知れる。cf. (1) A, PVSV 64,6: rūpaṃ cānyad eva syāt /; B, PVSV(M) 41,22: rūpaṃ cāsau / tato 'nyad eva syāt /; PVSV (D296b4, P447a3) : dngos po yang gzhan nyid du 'gyur ba ...; PVṬ (D150a7, P175a7) : **dngos po yang zhes bya ba ni 'dir rang bzhin yang ste tha dad par 'dod de de bas na gzhan nyid ni pa la sha las ldog pa'i ngo bor 'gyur ro ||** ; PVSVT 256,3f.: **rūpaṃ ca svabhāvaś cāsau bheda iṣyate / tato 'nyad eva palāśād vyāvṛttirūpaṃ syāt / yad vā rūpaṃ cānyad eva bhedasya syāt** / (2) A, PVSV 54,12: bhavantu nāma tadviṣayāṇi nirviṣayāṇi /; B, PVSV(M) 35,19: bhavantu nāma tajjñānāni nirviṣayāṇi /; PVSV (D291b6, P441a7f.) : **de dag gi shes pa rnams** yul med du zad mod | (| D : || P); PVṬ (D121a3, P143a3f.) : grub pa'i mtha' smra bas **de dag gi** (gi P : + is (illegible) D) zhes bya ba la sogs pas grub pa'i grub pa (grub pa'i grub pa D : grub pa grub par P) yin par ston te | **de dag gi shes pa rnams** zhes bya ba ni 'das pa la sogs pa'i shes pa rnams so ||; PVSVT 220,5f.: **bhavantv** ityādinā siddhasādhyaṭām āha / **tadviṣayāṇi** atitaviṣayāṇi /.
- 10) PVṬ や PVSVT ̐ には A, B, M, PVSV チベット語訳のいずれとも異なる PVSV の読みに関する言及が散見される (cf. PVṬ (D81b4f., P96a5f.) ; PVSVT 160,1f. etc.). 又、PVSVT 245,1ff. ad PVSV 61,24–26 には異読が “iti kvacit pustake pāṭhaḥ” という形で、特定の写本を示唆する言い回しで示されているのも興味深い。

〈文献略号表〉 PV I: Y. Miyasaka (ed.), “Pramāṇavārttikakārikā”, *Acta Indologica* 2, 1971/ 1972 & see PVSV, PVSV(M); PV tib: D4210, P5709; PVSV: R. Gnoli (ed.), *The Pramāṇavārttikam of Dharmakīrti*, Roma, 1960; PVSV(M): D. Malvania (ed.), *Svārthānumānapariccheda by Dharmakīrti*, Vanarasi, 1959; PVSV tib: D4216, P5717(a); PVṬ tib: D4220, P5718; PVṬ Ms: M. Inami et al., *A Study of the Pramāṇavārttikaṭīkā by Śākyabuddhi*, 東洋文庫, 1992; PVSVT: R. Sāmkṛtyāyana (ed.), *Karṇakagomin's Commentary on the Pramāṇavārttikavṛtti of Dharmakīrti*, 1943, repr. Kyoto, 1982; PVSVT Ms: Sh. Ihara, *Sanskrit Manuscripts of Karṇakagomin's Pramāṇavārttika(sva) vṛttiṭīkā*, Patna, Narita, 1998.

〈キーワード〉 ダルマキールティ, シャーキャブツディ, カルナカゴーミン,
Pramāṇavārttikasvavṛtti, 異読

(筑波大学大学院修了)